

末松氏

修身入門

教師用

全

40243

全	終
北河内小學校	第 四 號
明治廿七年 九月廿九日買入	

K121/1
20a

K121.1

20a

(文部省検定済)

文學博士 末松謙澄著

修身入門

全

發行所 精華舎

40244

修身入門 教師用

緒言

一 此書ハ予ガ別ニ著ハス所ノ生徒用修身入門ヲ教授スルニ方リ教師ノ便ヲ助クル爲メ著ハス所ナリ其二年生以上ニ在テハ予別ニ小學修身訓ノ著アリ

一 此書ノ體裁直チニ教師親ク生徒ニ教授スル口吻ヲ用ユ是レ教師チシテ翻案ノ徒勞ヲ免レシメンガ爲メナリ然レモ單ニ朗讀スルト一般ノ教授ヲ爲ス時ハ甚ダ艱澁ニ流レ易キガ故ニ善ク此書ノ趣旨ヲ咀嚼玩味シ然ル後チ



修身入門 教師用

緒言

一 此書ハ予ガ別ニ著ハス所ノ生徒用修身入門ヲ教授スルニ方リ教師ノ便ヲ助クル爲メ著ハス所ナリ其二年生以上ニ在テハ予別ニ小學修身訓ノ著アリ

一 此書ノ體裁直ニ教師親ク生徒ニ教授スル口吻ヲ用ユ是レ教師ヲシテ翻案ノ徒勞ヲ免レシメンガ爲メナリ然レモ單ニ朗讀スルト一般ノ教授ヲ爲ス時ハ甚ダ艱澁ニ流レ易キガ故ニ善ク此書ノ趣旨ヲ咀嚼玩味シ然ル後ナ

之ヲ自家ノ肺肝ヨリ吐出シ之ニ加フルニ丁寧反復ヲ以テスベキコト勿論ナリ

一 此書各題先ヅ一般ノ訓誨ヲ置キ次ニ圖解ヲ置キ訓誨ト圖解トヲ區別ス然レモ教授ノ實際ニ臨ミテハ或ハ兩者ヲ混和シテ之ヲ口授シ或ハ先ヅ圖解ヲ示シテ後ニ一般ノ訓誨ニ及ブ等ノ變例ヲ交フルハ固ヨリ妨ゲナシ要スル所ハ生徒ノ心ヲシテ倦ザラシムルニ在リ

一 諸般ノ作法ハ此書特ニ之ヲ記述セズト雖モ教授ノ實際ニ臨ミ宜ク之ヲ教示スベキナリ例ヘバ父母ニ禮スル子供ヲ説クニ方リテハ其ノ之ヲ禮スルノ方式ヲ教示スル

ノ類是レナリ

一 此書特ニ問題ヲ掲ゲズ是レ初學ノ兒女ニ在テハ未ダ多ク問難ヲナスニ適セザルヲ信ズレバナリ然レモ少シク進歩スルニ從ヒ時々極メテ簡易ノ發問ヲ試ムルハ妨ゲナシ例ヘバ正直トハ如何ナルコトゾカタハ者ヲ侮リテモヨキヤト問フノ類是レナリ

一 此書ハ生徒ヲシテ生徒用修身入門ヲ用井シムルモノトシテ著ハシタルハ勿論ナリトス然レモ萬一否ラザルモ仍之ヲ教師用ニ充テ可ナリ但此場合ニ於テハ教授ノ際少シク圖解ノ言辭ヲ變シ之ヲ例話ト爲スベキナリ

編纂者 識

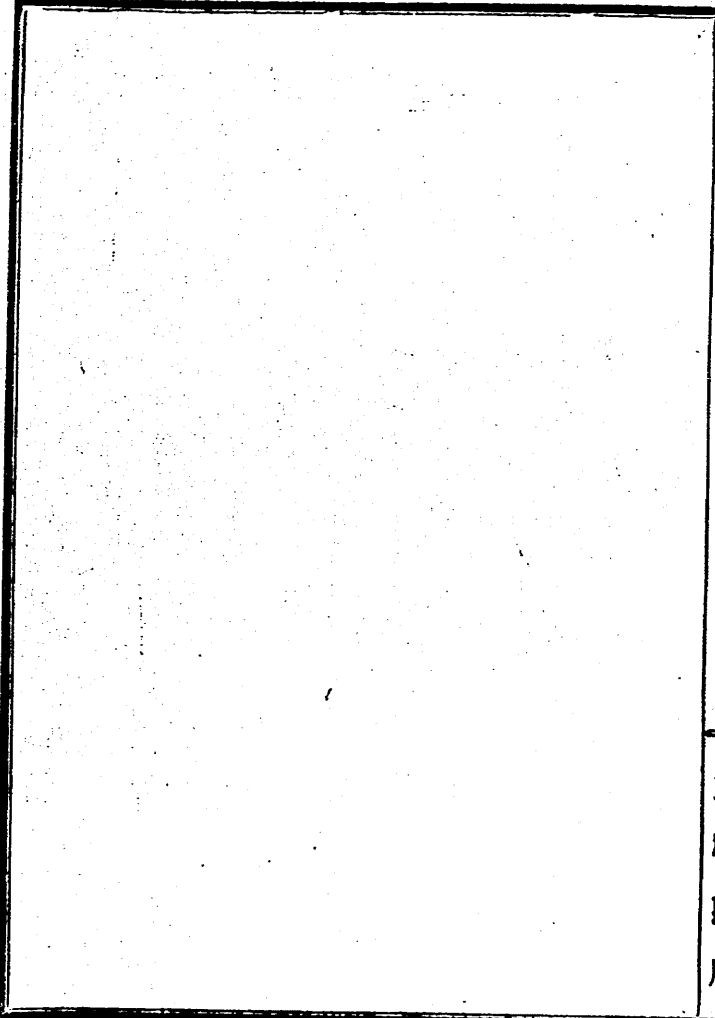
修身入門 教師用

題目

- | | | | |
|----|--------------|---|---|
| 第一 | 父母に禮する子供 | 一 | 丁 |
| 第二 | 祖父母に親切なる子供 | 一 | 丁 |
| 第三 | 兄弟なかよき子供 | 二 | 丁 |
| 第四 | 友たちとなかよき子供 | 二 | 丁 |
| 第五 | 病人に親切なる子供 | 三 | 丁 |
| 第六 | かたはものゝ親切なる子供 | 四 | 丁 |
| 第七 | 正直なる子供 | 四 | 丁 |
| 第八 | すなほなる子供 | 五 | 丁 |
| 第九 | 行儀よき子供 | 五 | 丁 |
| 第十 | 教師をうやまふ子供 | 六 | 丁 |

- | | | |
|------|-----------------|-----|
| 第十一 | 書物を大切に
する子供 | 七丁 |
| 第十二 | 勇氣ある
子供 | 七丁 |
| 第十三 | おやにはか
うくすべし | 九丁 |
| 第十四 | 兄弟はな
かよくすべし | 十丁 |
| 第十五 | 兄弟は兩
手の如し | 十丁 |
| 第十六 | 友たちは
親しくすべし | 十一丁 |
| 第十七 | 友の難儀
は救ふべし | 十二丁 |
| 第十八 | 年よりは
いたはるべし | 十三丁 |
| 第十九 | かたは者
はあはれむべし | 十三丁 |
| 第二十 | 教師は
うやまふべし | 十四丁 |
| 第二十一 | 行儀は
正しくすべし | 十四丁 |
| 第二十二 | いたづら
をなすべからず | 十五丁 |

- | | | |
|------|------------------------|------|
| 第二十三 | 過ちを
かくすべからず | 十五丁 |
| 第二十四 | 正直に
すべし | 十六丁 |
| 第二十五 | 危き遊
をなすべからず | 十七丁 |
| 第二十六 | からだは
大切にすべし | 十八丁 |
| 第二十七 | 食ひ物
を慎むべし | 十八丁 |
| 第二十八 | わる口
を云ふべからず | 十九丁 |
| 第二十九 | 疔癢を
起すべからず | 十九丁 |
| 第三十 | 弱さゆ
のをいぢむること
なりれ | 二十丁 |
| 第三十一 | 能く勉
強すべし | 二十二丁 |
| 第三十二 | 路くさ
をくふべからず | 二十二丁 |
| 第三十三 | 國と君
とを忘るべからず | 二十三丁 |
| 第三十四 | 君が代 | 二十三丁 |



修身入門 教師用

末松謙澄 著



第一 父母に禮する子供

れとよさまおかよさまの前にては、丁寧の禮儀をして、たゞ
 などをいはず、ほめられるやうにそるのが第一なり、どかく
 子供のうちは、親にぞんさいなる言葉をつかひ、出入りの時
 にも禮儀をなさざるものあれども、其れは善らぬ行ひあり、
 小さきうちは、猶更おとなしく親につらふべし、禮儀は子供
 にては、至て大切なるものなり、

(圖解)此繪を御覽兄弟の子供が父母に禮せる所なり、朝起きたる時、夜、寢どこに入る時、學校を去る時、行くため家を出づるとき、又歸りたる時、總てりやうにしてよく禮をなすべきなり、

第二 祖父母に親切なる子供

れぢゞさま、おはゞさまは、年よりたゞまへるが上に、れとゞさま、おかゞさまの親なれば、大切に思ひてつかへ、折々は肩なぞとゞさま、何事も親切にすべし、世間の子供にはぢゞはゞを大切にせせ、からりひなぞ云ひて、れほせをを守らぬものもあれども、極々よらぬことなり、いつも變りなく、親切を

盡すが肝要なり、

(圖解)此繪を御覽、女の子はぢゞさまの肩をたゞさま、男の子ははゞ様の前ゝて書物をひらき、二人とも祖父母に親切を盡して其心を慰め居る所なり、ぢゞ様、はゞ様の爲めには、此子供は孫なれば、おとゞ様、おかゞ様と同じ様、お、子供をうはるがり玉ふ者なれば、たれも此子供の如く、ぢゞ様はゞ様に親切を盡すべし、

第三 兄弟なかむき子供

日頃のあそびごとにてても、兄弟の喧嘩をせせ、仲よくすべし、兄弟の仲よき、何寄のことなり、兄は弟をいぢめ、弟は兄に

さからひ杯しては、兄弟ながら身の爲めによからず、仲よければこそ、たのしみもあるものなれ、

〔圖解〕此繪を御覽、是は兄を頭に、弟妹とも都合四人にて、菓子など分けて仲よく遊び居る所なり、總て兄弟は幾たりありとも喧嘩などせず、何事に付ても互に譲り合ひて睦ましくすること、此繪の子供のやうになすべきなり、

第四 友だちこなかよき子供

兄弟の次にて親しきものは、友達なれば、友達と喧嘩などするのよろしからず、學校のゆきかよひなど、年したの者をいちめたり、泣いたりする子供あるは、友達がひなきわざな

り、友達は互に親切を盡し合ひて仲よくすべきあり、

〔圖解〕此繪を御覽、此處は〔上圖〕女の子の友たちが二人にて手玉を取り仲よく遊び居る處、又此處は〔下圖〕男の子の友たちが二人にて竹輪をまはして仲よく遊び居る所なり、總て友たちが喧嘩口論をなし、つかみあひを爲すなどは、はなはと悪きわざなれば、たれも幼き時より、何事に付ても、此子供の如く互に仲よくしらすべし、

第五 病人に親切なる子供

たれも病にかゝれば、身おどろへ、心もよぶるものなれば、子供なりとて親切に氣をつけて、其心をなぐさむべし、病人の

そばにて、さわぎ、たはむれなどして、病ひにさはることをなすは至てよからぬことなれば、何事もねんごろにすべきなり。

(圖解)此繪を御覽、一人の子供が病氣せるは、様の前にて、おとなしく禮儀して何か物を云ひ居る處なり、かやうに親切になす時は、病人の心もなぐさみ、速になほるべけれど、世の中の子供には、病人の心にさからひ、病人の枕近くにて、太鼓を打ち、しこをふまなどして、病人の心をなやます者も少なからせ、甚たよからぬわざなれば、家の内に病人のある時は、誰も此繪の子供の如く、よく親切を盡す

べきなり、

第六 かたはものに親切なる子供

からたのそろはずして、なみく／＼ならぬは、生れつきか、又はけがななどによるものにして、からたのそろひたるものよりは、不仕合なるものなれば、われもかくありたらんにはと思ひやりて、親切にすべし、かたはものを見て、おもしろがり、からかひ、わらひなどするは、誠宜しからせ、かたはものには、取別け親切にする心掛けあるべきなり、

(圖解)此繪を御覽、此れは盲が小橋を渡り兼て居る所を、獨りの男の子が手引きして渡し居る所なり、總てかたは者

になんじふなる事あぞと見は、情けを掛て助くる事此子供
の如くなるべし。

第七 正直なる子供

うそをいひ、人をどまし、或は取るまじきものを取りおぼす
るは、みなよろしからず、正直にして何事もありのまゝにす
れば、人にもかはるがらるべし、正直は一生の得と云ふこと
ありて、子供のときより正直にすれば、死ぬまで自分の得と
なるものなり。

〔圖解〕此繪を御覽、此れは道行く人が物を落したるを、子供
が拾ひて其人に與へ居る所なり、總て人の物を我物とす

るは悪きわざなれば、拾ひものとして是れを我物とするは
宜しからず、又人が物を落したるを見て、知らぬふりして
棄置くも宜しからざるわざなれば、かゝる時には其品物
を其持主に返すべし、何事に付ても總てかゝる心持にて
正直を専らとすべし。

第八 すなほなる子供

目上の人にかからひ、目下の人をあなざり、人の云ふことを
きり、我がまゝ勝手あるはよろしからず、父母兄弟の云ふ
ことより、他人の云ふことまでも、よくきゝ、わけて、すなほに
すべし、子供のすなほなるは、かはゆきものなれば、よく人に

も愛せらるゝなり、

(圖解)此繪を御覽、此れは學校通ひの子供が、よく母の教へ
したがひ、すなはなる事を畫きたるものなり、此處は第一
圖其子供が顔を墨たらけになして歸れる故、母が顔を洗
へと教へて居る處なり、此處は第二圖其子が顔を洗ひ居
る處なり、此處は第三圖其子が顔を洗ひ終りて立派にな
りたる所なり、何事によらず、父母祖父母姉様兄様おどの
教は、よく守り、萬づすなはにすること、此子供の如くなる
べし、

第九 行儀よき子供

人の前にて、見ぐるしきかたちをなすは、子供なりとてよろ
しからず、客ある時に菓子などほしがり、又足なげたして、そ
の菓子をやたらし食ひなどするは、皆見ぐるしきかぎりな
り、何事につきても、行儀はおろそりよすべからず、

(圖解)此繪を御覽、是は一人の子供が、其おかし様に玩具の
馬をもらひ、丁寧に手に受けて戴き居る處なり、總て親よ
り物を賜はりたる時などには、行儀よく戴きをさむべし、
又其賜はりたるものは、親の手づから下し賜へる物なれ
ば、大切に弄び、心なく打ちこはす事など、なき様に心掛く
べきなり、

第十 教師をうやまふ子供

學問をならひ、智慧をみがくは、皆教師のおかけなれば、其れかけを思ひて、かりそめにも教師に無禮のことあるべからず、心のかぎりうやまふが、よき生徒なれば、教師をうやまふことをれこたるべからず、

(圖解)此繪を御覽、是は二人の子供が、途中にて我が學校の教師に出逢ひたれば、丁寧に禮をなして居る處なり、總て教師は我に學問を教へ、我智慧を磨き、吳るゝ先生なれば、途中にて出逢ふ時も、學校にてなす通り禮をなすべし、又教師にあらせども、我れより目上の人に逢ひたる時は、矢

張り同じ様に禮すべきものなり、

第十一 書物を大切にする子供

學問をれば、え、智慧をみがくも、みな書物の力によるものなれば、書物は、とても大切なものはなし、且つ書物には、時によりいとも尊き人のことがらをも書きしるしあるものなれば、これを粗末にすべからず、子供なりとて書物を大切にすべきものなり、

(圖解)此繪を御覽、此れは學校に行く子供が、書物をテーブルの上にて見終り、大事に是をカバンの中に入れ居る所なり、書物を粗末にすれば、墨などにて黒くなり、又破れも

して、用ひ立ぬ様よなり、新なる物を買ひ求めんとすれば、再び親に心配をかくべし、親たちは一冊の書物を買ひあさふるにも、我子の行末を思ひ、わざわざ御金を出して買ひ玉ひしものあれば、夫れを猥りにけがしやぶりなぞするは、不孝よも當る譯なり、されば書物をは此子供の如く丁寧に取り扱ふべきなり、

第十二 勇氣ある子供

事に臨みて心いさむは、子供よありてもゆよしきものなり、物おれち恐れて卑怯なるは甚た見ぐるし、彼の桃太郎が鬼が島に攻入り、群がる鬼共を物ともせず、遂に鬼どもを討ち

従へたる勇氣の如き、誠に勇の手本ともなすべきものにて、たれも日頃より勇氣をやしなひ、事なのぞとておくれを取らぬやうに、なしたきものなり、

(圖解)此繪を御覽、此處は桃太郎が犬、猿、雉(第一圖)と評議せる所にて、此處(第二圖)は鬼が島を討ち従へ居る處なり、此處まで桃太郎の話を適宜に話すべし)

桃太郎

むかし、爺と婆とあり、ある日、爺は山に柴刈にゆき、婆は川に洗濯にゆきたるが、婆が洗濯しける處に、一ツの大なる桃の實が、流れにつれて、浮きつ沈みつして下りけり、婆は珍らしく思ひ、かたへの竹の棒にて、これを引きよせ、取り上げ、るゝ、誠に類なき大桃なりければ、爺にも見せて食はせんと、急ぎ洗濯をしまひて家に歸れり、頓て爺も歸りぬれば、

もに桃を割りけるに、不思議も核の中より立派なる男の子一人飛び出でたり爺婆は一方ならず喜び、其子を桃太郎と名付け、心をこめて育てけるに、桃太郎は體たくましく、勇氣人にすぐれて成人しけり、かゝりければ桃太郎の鬼ヶ島に渡りて寶物を取り歸らんと志を起し、爺婆にも語り、其ゆるしを得しかば、婆に黍團子を拵へもらひ、支度を調へて出立したり、急ぎゆく程に、道にて一疋の犬出て来りて、桃太郎に向ひ、腰にさげたる何にて候やと問ひける故、桃太郎は、是こそは日本一の黍團子なりと答へければ、犬は、一ツ我も與へ玉へ、御供致さんと云ふ、桃太郎は、左らばとて、腰の包みより團子一ツ取出して與ふ、頓て一疋の猿来りて、同じことにて團子一ツを與ふ、次に一羽の雉飛び来りて、是も同じく、團子一ツを請ひければ、之に與へ、桃太郎の犬猿雉をつれて行く程に、鬼ヶ島の東門に着ければ、方まかせよ之を打破りて中に入れば、犬猿雉も一同引つゝきてかけ入りたり、鬼ども大に驚き騒ぎて、勢を揃へて打

てかゝるを、桃太郎始め、犬猿雉相手となりて大に戦ひ、小鬼どもを打ちなびけゝるに、鬼の大將赤童子大に怒り、鎧の棒を打振りて、桃太郎に打てかゝるを、桃太郎得たりと受けて、火花を散らして戦ひしが、遂に鎧の棒を打落し、引組んで赤童子を取て抑へ、生捕となしたり、赤童子はもはやせんすべなく、有りて有ゆる寶物を差出して降参せんと云ひければ、桃太郎、然らばとて打ち笑ひ、鬼どもの降参をゆるし、寶物を取集め、犬猿雉の手柄をもはめたて、勇みいさんで家に歸れば、待ち受け居たる爺婆も喜ぶ事限りなし、桃太郎は相知れる人どもを呼びつゝ、毎日酒盛をなし、鬼ヶ島の働きなどを物語りて、皆人を喜ばせぬめでたしく、

第十三 おやにはかうくすべし

我々の親は、我々のからたを生みつけ玉へる人なれば、いと
もたふとし、子たるもの、先づ第一に親に孝行をはけむべ

し親は孝行をはげむものは、其身もおのづから福を受くるものなり、孝行のすべきものにあらずや、孝行とは親の教にたがはず、よくつかへまつることなり、

〔圖解〕此繪を御覽一人の若者が、年老いたる親を扶けて瀧を見せ居る所なり、昔し或る樵夫の子が、親の酒を好むを見て、日頃おにかして親に酒を飲ませんと思ひ居しるど、貧乏にして意の如くならざるを、残念に思ひ居しに或日山に入りて木を伐り、誤りて下の谷に墮ちたるど、其の近邊に酒の氣のするより、不思議のことと思ひ、あたりを見廻すに、向ふの瀧の流れが匂ふやうなれば、試みよ

其水を汲きて飲みたるよ、酒の味のしければ、喜で汲み歸り、親に飲しめ、其後は毎日此瀧を汲みては、心の儘に親よすよめたりと云ふ話もあり、此繪は其事をかきたるものなり、孝子が大切に親に付き添ひて、瀧を見せる様如何にも親切の心は見え見ゆ、誰も能く親の心を慰むることを心掛け、物見などに出る時には、かやうよ親切を盡すべし、

第十四 兄弟はなかよくすべし

親子につゞいて、親し、その最も深きは兄弟なり、親子につゞいて、離るべからざるも亦兄弟なり、故に兄弟はたとひ如何なることありとも、争ひなどありてはならず、起さるにも寝

るにも、なかよくしてくらすが兄弟の道なり、

(圖解)此繪を御覽、是は二人の兄弟の子供が、何やらむつまじく話しながら、庭の内にて歩き居る所なり、第三圖にもある通り、總て兄弟は幾人ありとも仲よくよらじ、物を分け食ふ時などは勿論、僅のものを見るにも、自分獨りで見ることなく、兄なれば弟を呼び、弟なれば兄を呼びて、一處に連立て行き、其樂を共にするやう、互に親切を盡して、仲よくすべきものなり、

第十五 兄弟は兩手の如し

前課にて話せし如く、兄弟はしたしき上にも、離るべからざ

るものなることは、ちやうど兩手の如し、右の手は左の手をたすけ、左の手は右の手をたすけてこそ用も足るなれ、其れと同じく、兄は弟をたすけ、弟は兄をたすけて始めて兄弟のしたしきもあるものなれば、兄弟は兩手と思ひて互に助け合ふべきなり、

(圖解)此繪を御覽、是は一人の男が兩手をひろげて二人の子供に見せて居る所なり、總て兄弟と云ふもの、孰れも同じ親の血を分けて生れたる者なれば、體は二人なれども、本を云へば一人も同じやうなるものにて、人間の體に譬へて見れば、ちやうど兩手の如く、右の手も無てはなら

ず、左の手も無てはならず、左右の手がありてこそ並々の
はたらきも出来るものなれ、されは右の手が左の手を助
くる如く、兄の弟を助け、左の手が右の手を助くる如く、弟
の兄を助けて、仲よくすべし、兄弟と云へば姉妹のことも
固より同じことなり、

第十六 友だちは親しくすべし

友たちと交はるには、隔てなきやうにすべし、若し隔てあり
て、同ト處に居りても、心付けてまことの親しみは起らぬ
ものなり、只何事もうちとけて、親しくするがかんえうなり、
〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の子供の友たちが、一ツの机を

中にして、何やら書物を見て睦しさを以て居る處なり、
總て他人ながら親兄弟に次で親しきものは、心を知り合
ひたる友たちなり、友たちへ善き事をすよめ、あしきこと
を諫むるものにて、我身に取っては大切なる人なれば、日
頃より心を打あけて、懇ろに付き合ひ、親しくあすべきも
のなり、

第十七 友の難儀は救ふべし

人の難儀を見て、之をすくふはよきことなり、況して親しき
友の難儀を見ては、力のねよおかぎり之をすくふこそよけ
れ、世には日頃の親しみに似けなく、友たちの難儀を見すつ

るものあるは、甚どたのみがひなきことなり、能々つゝしむべし。

(圖解)此繪を御覽、昔し唐土に司馬光と云へる名高き人あり、其人の幼き頃のことなるが、或時友達の子供と遊び居たるに、其中の一人が木の枝から落て、甕の中に陥り、既に命も危かりしに、司馬光は早くも甕を打破ることを思ひ付き、石にて打破りしかば、其子は水と共にほそはしり出て、命助かりたり、是は其様を畫きたるものなり、友の難儀を救ふは様々あるべけれども、道にて誤て溝に落込みたるを助けて引出すも、救ふの一ツなり、難儀ある時、友を

見棄つべからず、

第十八 年よりはいたはるべし

年よりは我々より日うへの人なり、其上わかきものとはちがひ、からと衰へて自由ならず、ゆくさきも短きものなれば、これをなぐさめいたはるべし、年よりをないがしろにし、又はおろそかにするは甚たよろしからず、心得べきことなり、(圖解)此繪を御覽、是は途中にて俄かに雨の降り出し、時、一人の生徒が、一人の老婆の雨にぬるゝを氣の毒に思ひ、己が傘の下に入らしめ居る處なり、總て年寄りたる人を見ては、かやうのいたはりを加ふべきなり、

第十九 かたは者はあはれむべし

かたはものに親切にすべきことは前にものべたるが、かたはものを見て、かれをなみくゝの人ならば、心にひけを取ることゝなかるべきにと思ひやりて、いたはりあはれむべし、かたはものをれるそかに思ふは、はなはたよりらぬことなり、

(圖解)此繪を御覽、是は船より上らんとするかたはものを見て、一人の子供が憐れに思ひ、手を引て親切に扶け居る所なり、總てかやうなる不具ものゝ難儀を見たる時は、我が力の及ぶ限りは、これを助くる心あるべきなり、

第二十 教師はうやまふべし

教師を敬ふべきことは前にものべたるが、己れをよしへ、己れをみちびくは、いづれも教師のはねをりにて、我々がやうやくにして人なみとなるも、をな教師の恩なれば、其恩をありがたく思ひ、心のそこより之をうやまふべし、教師をれろそかと思ふ人は何事も學び得ざるなり、

(圖解)此繪を御覽、是は二人の子供が教師の前にて敬禮をなして居る所あり、此れも第十圖で云ひし如く、我れを導き教ふる教師は、我れに取りては甚ど有難き人なれば、學校おても何所にて、も、かりをめに失禮のふるまひなく、

心の底よりあがめ尊びて、うやまふべきなり、

第二十一 行儀は正しくすべし

行儀よき子供の話しは、前にも述べたる如し、人はたちるふるまひとて、立つにも坐るふも、心を用ゐて、しとやかにし、がさつに、あらくしきことをなきやうすべし、人の前にて禮儀を失ひ、麤略の振舞あるべからず、

〔圖解〕此繪を御覽、是は二人の子供が膳に向ひておとなしく食事をして居る所なり、誰にても食事の時はおとなしくして、茶碗の飯や椀の汁をこぼしなごせぬやう、氣を付けて食すること、此繪の子供の如くし、其他何事に付ても

總て行儀よくなすべきなり、

第二十二 いたづらごをなすべからず

とづかの遊にも、身のためになることをかんがへて、なすやうにすべし、雀の兒を捕へ、犬をうち、襖や壁よりくがきをなすなど、わるきいたづらはなすべからず、いたづらより、思はぬけがなご引きおこすこと、まよあるからひおれば、いたづらごとはなすべからず、

〔圖解〕此繪を御覽、是はいたづら子供二人が、一人は繩にて罪もなき犬をくより、一人は棒をふり擧て其犬を撃ちたる故、犬は大にたけり狂ひて、子供に噛み付きたる處なり、

總て益なきいたづらを爲す時は、此の子供の如く、思はぬ大けがをしいたし、大事の體に疵を付て、親にも心配を掛け、不孝となるものなれば、總ていたづらなることはすまじきわざなり、

第二十三 過ちをかくすべからず

如何なる人にて、思はぬをさうと云ふことはあるものなるが、爲し伏ることは、とりうへしはつかぬものゝ爲、速かよ之をわび、以後をつしめて、ふたよびなきやう心掛くべし、いつまでもあやまちをかくして、知らぬかはするは甚たよろしからず、心得おくべきことなり、

(圖解)此繪を御覽、是は一人の子供が、思はぬさうにて、親より買ひ賜りたる石盤を破りたれば、ひたすら其過ちをこひ居る所なり、總てかやうの過ちありたる時は、包み隠さずして、其をさうのわびを云ふべし、こひてゆるしを受けたる上は、再び此様の過ちなきやう、後來を慎むべし、

第二十四 正直にすべし

正直なる子供の話し、前にも述べたるが、心にもなきやうを言ひ、又取るまじきものを取りて、我物となすのたぐひは、皆よろしからざるべきなり、何事も只ありのまよし、取るまじきものは取らざるを、正直とは云ふなり、人は正直がかん

じんと知るべきなり、

(圖解)此繪を御覽、是ハ子供が學校に持行しかばんを、公園にて忘れたるを、傍に見て居し一人の正直なる子守が拾ひ取りて、其子供に渡して居る處なり、總て人の忘れたる物などを見付けたる時は、親切に其忘れ主に返し、あしき心を浮べさること、此子守の如くなすべきなり、

此處左の如く敷衍するもよし、

すべて、有ることを無しと云ひ、無きことを有りと云ひ、人をあざむきうそを云ふは、皆正直ならざる行ひかれは甚だ宜しからず、是も前に話したる司馬光の幼き頃のことな

るが、或日胡桃の實をおもちやにして居たる所に、光の姉來りて皮をとりやらんとせしむ、かたければ取れず、其まゝ棄置て他へ去りたり、其後一召仕ひの下女が來りて、其實を熱湯につけ、たやすく皮を取りて遣りたる後に、其姉再び出來りて、誰が皮を取りたるやと尋ねしとき、光、我が手がらにして自分がとりたりと答へたり、光の父之を聞て、何とて左様のうそを云ふぞとて叱りければ、光は大に後悔し、是より一生うそを言ひざりしとぞ、是れと同じことにて、如何なる些細のことも、うそを云ふまじきものなり、

第二十五 危き遊をなすべからず

同じ遊びごとをなすも、安穩のことをえらび、けがせぬやうなすべし、みたりに高き木に登り、泳ぎをしらぬして深き水に入るなど、かりそめにも危き遊びごとをなすべからず、わづかの遊びごとにて、其身をそこなひ、不孝の罪をねかすことなしとも云ひがたし、よくくつゝしむべきなり、

(圖解)此繪を御覽、此處(上圖)は二人の子供が、チツキを打ち合ひ、一人の子供の足の甲に中り、怪我したる處なり、又此處(下圖)は或る子供が竹馬に乗りにて、駆け廻り誤て地に落ちたる處なり、總て危きことをなして遊と爲す時は、此繪の通り思はぬ怪我をなすものなれば、此繪を見てもよく

く心して、危きことと近よらぬやうにすべし、

第二十六 からだは大切にすべし

からだは父母より賜りたるものなれば、をまつと思ふことあるべからず、我が身を大切にすることは、とりもなほさず父母のからだを大切にすると同じわけなれば、これも孝行の一ツと思ひて、我れと我が身をそこなはぬやう心掛べきなり、
(圖解)此繪を御覽、是は或る子供がからだを疎末にして不養生せしより、煩ひ付き、醫者が看て居る處なり、總て人の體は鳥渡見れば強きやうなれど、實は甚だ弱きものなれば、不養生をするときは、忽ちに病を生じ、命を落すことあり

るべし、されば平生より我が體を大切よすべきものなり、
是も孝行の一ツなり、

第二十七 食ひ物を慎むべし

病は多く食ひものより起るものにて、食ひもの一氣をつくる人は病よかよることすくなし、はやりやみなども、食ひ物より起ると云へば、熱せぬくたもの、かはりたる食ひものなとは、心して食はぬをよしとす、又齒の痛みなどは多くは甘きものより起るものなれば、甘きものなど、食ひ過ぐるは宜しからず、病は口より入ると云ふこともあり、慎むべきなり、
〔圖解〕此繪を御覽、此處〔上圖〕は一人の子供が、姉の止むるを



も聽かず、やたらに柿を食ひ居る處、又此處〔下圖〕は其子が食傷して苦し居る處なり、善し悪しをも擇ばず、やたらに物を食ふ時は、忽ちに中てられ、大事の體をもそこなふことあれば、能く氣を付て食ふべきなり、

第二十八 わる口を云ふべからず

我々身をかへりみずして、人のわる口を云ふはよろしからず、何人もよきことのみはあらず、故にあしきことは之をすて、よきことは之をほむべし、人をそしれば、己れも人よそしられ、人をほむれば、己れも人にほめらる、わる口を云ふものは、兎角人よ憎まれ、わざはひをまねくものなり、去れば、わざ

はひは口より出づ」とも云へり、わる口は云はぬものなり、

(圖解)此繪を御覽、此は二人の男の子が一人の女の子をなぶり何やかと悪口を云ひて泣せし處より一人の男が來りて二人の男の子を叱り居る所なり、總て人の悪口を云ふは宜しうらず、自分なりとて人より悪口を云はるれば好き心持はせぬものなれば、誰れも同じことより思ひやりて、かやうのことは云はぬものなり、人の悪口など云ふ人は己れもいつか大なる禍を被るべし、

第二十九 疝癢を起すべからず

わづかの事より氣をいらち、辛抱の心なきはよろしからず、

何事も己れのまゝならぬは世の中の習ひとあきらめ、疝癢をおこさぬやうよすべし、分別なく怒り罵るゝ元來己がまゝより起るものにて、後悔すること多し、されば疝癢の必らずおこさぬやうにすべし、

(圖解)此繪を御覽、是は子供が何か氣に入らぬことありて、我まゝにも疝癢を起し、此通り(上圖)今まで遊び居たる獨樂や、太鼓のはちを罪もなき下婢に投付けたるを以て、頓て此通り(下圖)其親に叱られ居る所なり、總て氣に入らぬことありとて、疝癢を起すは我まゝより來るものなり、何事も堪忍を先にして、疝癢は起すべからず、

第三十 弱きものをいぢむることなかれ

世にはとかく弱きものをあなどりて之をいぢむるものあれども、これ甚た悪きわざなり、弱きものをいぢめて、己れつよきやうに見せんと思ふは間違なり、誠し勇氣ある人は弱きものをは、殊更憐み助くるものなり、とかのみならず、弱きものをいぢむれば、後し己れ大なる禍を受くること多し、かの猿蟹合戦の話を見よ、猿は蟹をあさむきたるのとならず、蟹を弱きものと見て、堅き柿を投げ付て、いぢめしかば、後し己れ遂しその身を滅したり、よくよくかんがふるべし、

(圖解)此繪を御覽、此所右圖は猿が柿を蟹に投げつけ居る

處、又此所(左圖)は猿が杵臼、卵蜂どもし攻つめられ居る所なり、今猿蟹合戦の話と話して聞せん、(爰にて左の話を適宜に話し聞かすべし)

猿蟹合戦

むかし、一疋の猿ありて、山の麓を廻りけるに、不圖一疋の蟹に出遇ひたり、猿は一ツの柿の核を拾ひ、蟹は一ツの焼餅を持居りたり、猿は其焼餅を見て、一まうけせんと思ひて、蟹に向ひ、せうぞ柿の核と焼餅とかへて、下さるまいかと思ひしかば、蟹は直に承知して、焼餅を猿に與へ、其代りに柿の核を得て、直にこれを其あたりへ植付しに、柿は速に芽が出て、僅の間に見上るは、高く延び、枝のしるまで實を結びたるが、蟹は木に登ること出来ざる故、登りて實を採り與れるやうに猿に頼みたり、猿は直に木に登り、熟したる柿は己れ飽まで頬の囊に詰め込み、熟せざる柿のみ蟹に投げ付けたる、蟹は大に甲を傷けられ、やうやくの事に

て命を助かり、我住穴に馳せ込み、痛さに堪へず臥し居りたり。蟹の親類や仲間者ども、事の次第を聞いて大に怒り、つひに猿に向ひて戦を開きて、猿の本陣を襲ひしかば、猿は大軍を引きつれ、逆落しに攻寄せ來りけり。蟹は迎も叶はぬ勢を見て取り、益々憤り、我穴に歸りて軍評定を開きたり。茲に杵臼蜂卵出座して、敵打の謀を定め、猿の本陣に和睦を請ひ、猿の大將を誘ひける。猿は得たりかしこしと、手ぶらにて蟹の家に来り、圍爐の傍に坐りたり。此處にて猿の腕先に焼付たり。猿は大に驚き、痛さを忍ばんと、辣味噌桶に手をさし入るれば、爰に隠れ居たる蜂俄に飛び出で、猿の泣面をさしけるに、ぞ猿はたまらず大聲に叫びつゝ、裏門さしてかけ出しけるに、杵臼の上より落ちかゝり、大地にドット倒れたり。之を合圍に、數多の蟹共、剪刀はさみを高く振り上げ、四方より猿を取捲き、散々よはさみたて、殺したりとぞ。

第三十一 能く勉強すべし

遊ぶは樂にて、勉強は苦し、去れど樂なりとて遊び居れば、學問も智慧もなき人となり、苦しくとも勉強すれば、學問もでき、智慧もまして、善き人となる。後の苦しみは今の樂にはかへがたく、今のらくは後の苦しみにかはがたきものなれば、能く勉強すべきなり。

(圖解)此繪を御覽、是は子供が一生懸命になりて學問を勉強して居る所なり、幼き時は別して勉強がかんじんにて、勉強さへすれば、智識もたけ、才能もまして、行々は如何なる名高き人とも成り得べきものなれば、幼き時より心を

こめて、此子供の様に勉強すべきなり、

第三十二 路くさをくふべからず

學校に通ふときなど、家を出るにも時間をたがへぬやうにすべし、又途中にて面白きものなどを見て、むたに時間をつひやすはよろしからず、遊歩の時間は別に之れあるものなれば、其ほかには、課業をつとめ、いさゝかたりとめられたりの心を出して、道くさをくふべからず、道を行くに空をながめ、わき目をふりなどするは、時のつひゆる計りならず、つまづきころび、或は物に行きあたりなどすること多ければ、よくく慎むべし、

〔圖解〕此繪を御覽、是は學校通ひの子供數人が、途にて釣をして居る人のそばに立ち止まり面白さうに見て居り、他の一人は見向きもせず、先きに行く處なり、總て學校の行通ひなどには途中に如何なる面白き物ありとも、それに氣を取られて、浮か／＼と時間をつひやすなど、途くさは爲すべからず、先きに行く小供の様に、他に氣を取られず、一途に我が志す處にのみ足を向くべきなり、

第三十三 國と君とを忘るべからず

國とは我々のすむ處にして、君とは我々のすむ所の國を支配し玉ふ御方なり、我々は此日本に住むものなれば、一日た

りとも此日本國あることを忘るべからず、又我々を支配し玉ふ君をば、一日たりとも忘るべからず、我が身のやすきは國の恩、我が國のやすきは君の恩、國をければ君なく、君をければ國なし、國と君とは忘るべからず、

(圖解)此繪を御覽、此所(上圖)は天長節、紀元節の日に家々が日の丸の國旗を軒先に掲げて、祝ひ居る處なり、又此處(下圖)は至尊の君が觀兵式に御臨みある處にて、菊の御旗も見ゆ、我々はすべて此國に生れ、此君の恩澤にうるふものなれば、めめく國と君とを忘るべからず、

第三十四 君が代

本課は諷誦を首とす、歌の意は、我が大君の御代は千代も八千代もかぎりなき御代をすぎ、たとへばさゞれ石と云ふさゞやかなる小石のおひくくと生長して、末の末に大なる巖となり、なほ其巖の年へて苔のつくまでも、變りなく、目出度き御代のつゞけよびしと祈るなり、石は生長するものにあらず、されば斯く云ふは愈々其久きを祈るの心著し、誰も其心して我が大君の御代のさかえをいのるべきなり、

(圖解)此繪を御覽、是は我大君のいまします東京の御城の正門なる二重橋の景色なり、此に住み玉ふ大君のことをば、此繪を見るよ付ても、有りがたく思ひ、千代に八千代に、

御榮えあらせられんことをねんじまるらすべし、君に忠
 と云ふことあり、忠とは能く君に事ふることなり、忠と孝
 とは我々が身を修むるに最も大切のことなれば、誰も幼
 くとも常に此事を心にかけ、寝ても覺ても忘るべからず、

修身入門 教師用終

明治二十五年六月廿四日印刷 入門
 明治二十五年六月廿五日出版

定價金 八錢



著作兼
 發行者

福岡縣

末松謙澄

東京市芝公園第五號地

發行所

精華舍

假事務所東京市芝公
 園第五號地九番乙

印刷者

曲田成

東京市京橋區築地二丁目
 東京築地活版製造所内

